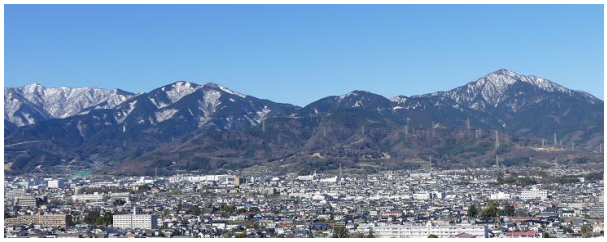
キャンパスの四季　Four Seasons in SHC　(No.56)　2016/01/31

＜一転＞前号での “暖冬!” から一転して南方諸島にも雪が降るような記録的寒波が襲来しました。SHC でも雪こそ降らなかったものの霜、霜柱、氷柱(つらら)そしてビオトープの池にも連日氷が張りました。富士の白さも平年並みにもどり、大山、丹沢(SHC の北から北西)も雪化粧の姿です。(右の峰：大山、左の山塊：丹沢)→



＜こおり＞寒さの中では水面に張るこおりのほか雪、霜、霜柱、つらら、あられ(霰)、みぞれ(霙)などいろんな形の氷が主役です。それぞれ難しい漢字があてられていますが、おおもとには “水” に “丶” が付いただけです。“人” という字のように誰にも分かる易しい字がいいのでしょうね。さて、気温が氷点下になれば水が滴るところにつららができ野原や田畑に霜が降ります。冷凍庫の中でもこれらは見られます。霜柱はそうはいかず、土が細かくて毛管現象で水分が土中から地表に昇ってくるところにだけ育ちます。道端できらきら光る霜柱を踏み歩きその砕ける音と靴裏の感触を子供の頃に面白がったのではありませんか。「縄帯の倅いくつぞ霜柱(一茶)」そして「霜ばしら　冬は神さへ　のろはれぬ　日ごと折らるる　しろがねの櫛(晶子)」、一方では霜柱のちからを「霜柱石燈籠は倒れけり(子規)」。

(氷)“こおり” の象形文字から生まれた “冰(ひょう)” の “冫” から “丶” が生き残って水の左上に付いたようです。

＜平常＞いつもの冬に比べてなかなか姿を見せないので心配していたのですがようやくマガモたちがビオトープの池に姿を現しました。池底を脚でかき回しては水面下に頭を突っ込み餌を食べています。小さな池に十羽以上は過密なのですが、面白いのはごく少数を除いて団体行動です。ドングリを食べに上陸(?)そして水に戻るときも一列になっての行進です。ジョウビタキやツグミも姿を無事見せるようになりました。

＜異常＞遅ればせながらいつもの冬の景色の中に冬の鳥が姿を見せるようになったのですが「どうしたのかな」と思う景色もあります。日当たりの良い斜面の一面にチガヤが狂い咲いています。5 月から 6 月にかけて咲くのが普通です(No.40 参照)。

(文と写真：松本正勝)